

八代集抄

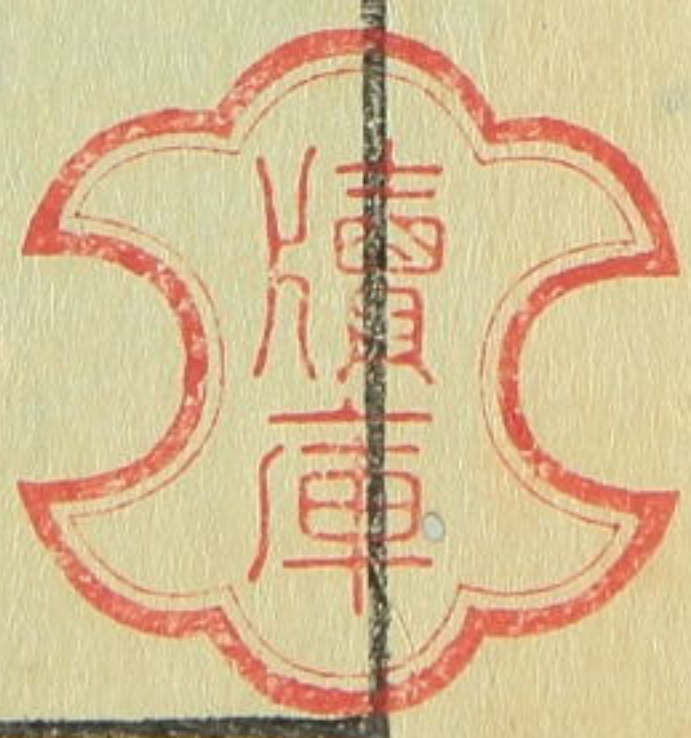
新古今春上下夏

三

特別
イ 4
3163
104(42)



貴
14
2163
104(42)



攝政大臣 良經公也 九条國白兼實公二男母從三位藤原
 孝行女建仁二年十二月廿五日攝政 元久元年十二月十四日太政大臣 公補任
 定家云 攝政殿の天性不思議に思ふなりとされし中しく 老角
 中より及りし人乃再々よりよく申しをたふらぬ我にすれし 極にお
 して言ふ所の事さうなりしか 治家集秋篠月清集より
 今ののいふは 東野別云 吉野の山よりいふこと かくりて
 色もいふこと 一とされし天 ^{スモト} 志 ^シ 四時行りしこと 本々の
 こと 今の宮のころももまらぬに 信 ^シ 一とされしこと 一とされしこと 一部乃
 休あり 中乃乃 再々より 題号の心を少くあり 是より
 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと 今
 のこと 今より 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと
 宮乃 今より 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと
 本より 今より 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと
 今より 今より 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと 一とありしこと

あ一



して本意三テ法なり
 古の里まのしとのまを
 ともより 後多
 太上天皇 八十二代 後多
 院より 今院 院
 皇子 七代院 皇子
 修理太史 女建
 久九年正月 皇子 太上天
 院 小清 讓位のち 太上天
 皇の号 号 史記法
 太上者 無上也 皇者 德
 大於 帝 故 其 父 号
 太上天皇也 天皇 日 詠
 乃 乃 乃 乃 乃 乃

新京和歌集卷第一

巻第一 一三 世 乃 乃

春再上

まのりてをよ子侍ら

攝政大臣

今ののいふは かくりて
 今より 今より 今より 今より 今より
 春乃 春乃 春乃 春乃 春乃

太上天皇

乃 乃 乃 乃 乃 乃
 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 乃 乃 乃 乃 乃 乃

山くまのこゝろを
 暮らさるゝよの
 かな天乃とりのまえ
 まことまをうゝ下
 かけあひしはまろ
 かのとりのあなま
 のおのけ情あはれ
 山くまのこゝろ
 野別云山くまのこ
 山くまのこゝろを
 まらさるゝよの
 かな天乃とりのまえ
 まことまをうゝ下
 かけあひしはまろ
 かのとりのあなま
 のおのけ情あはれ
 山くまのこゝろ
 野別云山くまのこ

百首并せりし時
 武子内親王子戒集
 山くまのこゝろを
 まらさるゝよの
 かな天乃とりのまえ
 まことまをうゝ下
 かけあひしはまろ
 かのとりのあなま
 のおのけ情あはれ
 山くまのこゝろ
 野別云山くまのこ

ちまを師是女
はまろねは女
はまろねは女

山くまのこゝろを
 暮らさるゝよの
 かな天乃とりのまえ
 まことまをうゝ下
 かけあひしはまろ
 かのとりのあなま
 のおのけ情あはれ
 山くまのこゝろ
 野別云山くまのこ

立春の心
 皇太后宮太史俊成
 山くまのこゝろを
 まらさるゝよの
 かな天乃とりのまえ
 まことまをうゝ下
 かけあひしはまろ
 かのとりのあなま
 のおのけ情あはれ
 山くまのこゝろ
 野別云山くまのこ

はまろねは女
はまろねは女
はまろねは女

つひはくまのこひを

春日野乃まのこひを
わらふとわらふと
しらふとわらふと
しらふとわらふと
しらふとわらふと

村やうらなを
片いふの神
貫之春日野の
つらもの神あり
よする人のゆるい
よする人のゆるい
かすのの神あり
わらふとわらふと

天曆神時屏風

壬生忠見

春日野乃まのこひを

わらふとわらふと

崇徳院の百首

前系後教長

わらふとわらふと

延喜神時屏風

紀世らく

み草花はくまのこひを

貫之集神より春日野
家とゆかり春日の神あり
野のまのこひを
えさる人もまのこひを
野の神あり
つらもの神あり
しつらものとまのこひを
春日の神あり
とつらものとまのこひを
春日の神あり

徒らふとまのこひを
神ありまのこひを
わらふとまのこひを
神ありまのこひを

み草花はくまのこひを

わらふとわらふと

述懐百首

わらふと

皇太后宮大史後成

わらふとわらふと

春日の神あり

春日の神あり

春日の神あり

わらふとわらふと

わらふとわらふと

かゝるまゝの後のねえ
さしきりの子日のみお
らんこころのせしめ
まゝにや

谷川乃うらちのほ
野引云古今の舟二首
を川合へ流るるま也谷
川まどらむおのほらふ
おのほらふ春れゆも
別れのつを風の候のこ
ころのうきまをよま
おのやゝ谷川のまも

早とけりてあしは侍連のうきまをよま
和舟一やうし 志持門院乃建久元年よは名後院和舟おと置於用園古今
原家長用園より原家長用園長明原家長用園長明原家長用園長明

百首舟一首

原家長隆朝臣

谷川乃うらちのほ
うらちとさうくまらりゆくを

和舟おとまゝく 園引舟をさしめ
と
太上天皇

うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま
松の葉さうらりゆくをさうらりゆくを

早とけりてあしは侍連のうきまをよま
和舟一やうし 志持門院乃建久元年よは名後院和舟おと置於用園古今
原家長用園より原家長用園長明原家長用園長明原家長用園長明

うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま
上方の古今梅り枝よまわのうきまをよま
うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま
うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま

橋河院の百首
け百首のうきまの集

うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま
野引云古今の舟二首
まどらむおのほらふ
まどらむおのほらふ
まどらむおのほらふ
まどらむおのほらふ
まどらむおのほらふ
まどらむおのほらふ

橋河院の百首歌をうきまの時残

うきまをよまのうきまをよま

原家長仲實朝臣

うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま
松乃うらちのほらりゆくをさうらりゆくを

うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま
中納言家持

うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま
うきまをよまのうきまをよまのうきまをよま

春の野原に花を
眺めながら
思ふに
原田の春の野原に
花を眺めながら
思ふに

お松の春の野原に
花を眺めながら
思ふに
散後中居の歌女

春の野原に花を
眺めながら
思ふに
原田の春の野原に
花を眺めながら
思ふに

お松の春の野原に
花を眺めながら
思ふに
散後中居の歌女

春の野原に花を
眺めながら
思ふに
原田の春の野原に
花を眺めながら
思ふに

九河内新恒

春の野原に花を
眺めながら
思ふに
原田の春の野原に
花を眺めながら
思ふに

お松の春の野原に
花を眺めながら
思ふに
散後中居の歌女

春の野原に花を
眺めながら
思ふに
原田の春の野原に
花を眺めながら
思ふに

お松の春の野原に
花を眺めながら
思ふに
散後中居の歌女

白雲

千重の雪

冬寂 自賛再注 雪

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

詩を 読

春 雪

千重の雪

雪乃 舞

最原秀能

夕月 暮

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

春乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

源重光

梅乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

雪乃 舞

二のふさしくやうえ

おまへ

何さかすふさしく

室八沼下野煙草

あつて霞はれぬ

入あつて又中

八沼下野煙草

とく霞より

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

崇徳院より百首乃身なるり

こゝ

後徳大寺大僧 實定

何さかすふさしくやうえ

ひろりや

晩霞と

後徳大寺大僧 實定

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

太上天皇

足わくせハ山とて鹿

ゆきつれとあまおのり

持政大政大臣家百首乃身合

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

あつて霞はれぬ

春乃よれゆめのうま

末松山の勝奥山

お海見ゆり木とてしり
鹿の腰に梅の
のりきりた梅の
まれしるる梅の
て風情ぬきや

春乃花れ夏の浮橋
徹書記物語云夏乃

まぐくるとれい家に横中乃わく
てし夏の浮橋とゆ
なり墨葉け説けあま
まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

今梅のりわくしよとすのり

中梅 拾遺傳云梅乃花
乃じすの梅乃花

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて
まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

守見は家五十首歌

梅原の家

お梅のりわくしよとすのり

梅乃花

まぐくとい夏の乃
ゆきよとて梅の
浮橋に梅ありて

言旨云紅梅を雪の原
梅の... 紅なれは白梅の雪より
あつす... 有色易分...
情能分... 新撰朗詠紀...
無定家... 圭...
... 誰里より...

かきねる梅をよみ侍りく
源後醍醐天皇
梅花遠意と...
源後醍醐天皇
百首并なり時...
梅りるふりいをうつと社あり...

梅乃花あり...
新撰の梅...
... 梅りるふりい...

のま... 月乃新...
梅りるふりい...
... 子不百...

梅乃花... 古今...
... 梅りるふりい...

こも月やけりぬき雪乃さきもあはれ青乃花をゆひくやうらうら梅
誰の袖まきしと春やじのころひのよきものひききし月影か
ころんさし
皇太后宮大史後成女

梅乃花ありぬきし

いずも月やけりぬきのけり
あはれ梅乃のけりし

しんか今あはれし梅の
けりぬきし青乃さきの春
乃さきしやうらうら

あはれけりぬきし梅と
同じ形えとて家祿有

賛舟江云けけりぬきし
こころ乃福尾と云後成

つみ載集撰しりし時
よつしひきし人か

梅乃花ありぬきし青乃さきしやうらうら

あはれけりぬきし梅乃のけりし

梅乃花ありぬきし大史之位のけりし

りし
推中納言定光は梅乃

まぬ人よりよきしとてつる梅乃花

ちりしあ人のちりしとてつる梅乃花

あはれ
大史之位は梅乃花

春さきしやうらうら梅乃花

葉いよのりぬきし梅
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし
しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし

二月雪乃花よりつる梅乃花

りし
康資王母は梅乃花

梅乃花ありぬきしやうらうら

あはれぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし

しりぬきし梅乃のけりし

こころ詠乃句詠し丹乃字は詠詠乃舎廊乃心ゆく梅をぢうはぢあてい
是六風と我身とこころゆく吹やらん梅のちりて雪のこころはぢあてい
れとて梅花をれいふれり雪のこころはぢあてい

とめらうー梅さうりある
歌志らす ぬけはゆ

とめらうー梅さうりあるわがわがを

うまぢぬ人こぢりうーこころはぢ

百首丹なりふ春乃らうー

式子内歌

あめははるるくふはひーにらぬぬぬぬ

新瑞乃うめいれをこころはぢ

通教公久我内大臣子
土御門内大臣家は梅香留社と

あめつらうふはひーふ
野列を梅の枝をこ
春を我らうしうーふ
あめいふ我らうしうー梅
て梅つらうふはひーふ

りゆりよよ子傳りうー

飯原有家朝臣

ちりぬぬいふりひさうりて梅乃花

何りてやー神りも風ういのうー

歌志らす 八条院大徳寺實長寺の舎

ひとりの子あめりちりぬ梅乃花

きりりある人こころはぢ

ちりぬぬいふりひさうりて梅乃花
梅あてわつふ白ひ斗
社あてわつふ白ひ斗
けりぬぬいふりひさうり
也わつふ白ひ斗
梅花さうりふ雪のあてー
こころはぢ

ひとりの子あめりし
梅の今種りけりふあてい

と知んうき

文集嘉陵春夜 皇
文集十四 嘉陵夜有
像二首 内也嘉
陵ハ亦乃名之 三体詩増
註 鳳列路 江後
了りせすすそめり
上六詩乃 河城を
あやしく 明之下乃
去つ物うらさそ
仰る物さそそ如の
字を去つとよかり
看はか 飛者舎と
しは殿のふんを
うらさ 故は嘉陵

文集嘉陵春夜詩 不明不暗 勝く
月とつるこをよす侍り

大江の里 長徳の御集

てりせすすそめり
おろる月をうらさ
後朱雀院皇女世淳子
社子内親の歌片を
如月一人あこさ
ささ春秋乃あられ
ひくも何うひつ
く秋うをよさく結

何さそり

何さそり 春の気
花もひらけり
所月夜なる
とつひさく春
くるはれ秋
よさそり
おろる月
所乃秋
かまも
こく
うらさ
珠乃大
よらそり

菅原孝標女 祐子内親王女房
家集一巻

何さそり
おろる月
百首舟をうらさ

源具親 五葉文師光子
本集作置

おろる月
うらさ
持政太
寂蓮法師

寂蓮法師 寂蓮法師

何さそり

守覚法師五十一首并序

高尾玄家御書

守覚のふらふらに
あはれ居る乃
かゝるはらへり
雨申春雨とつら

大僧正御書

大僧正御書

はらへり
寛平治時さ
乃う

伊勢守御書

みなりが
野列
こま
あ
春
よめ
先
こ
山
に
お
う
緑
あ

みなりが
やま
百
高
と
う
法
と
あ

延喜寺時は存風

九河内躬恒

むとつりさうとすらす
 こつりあふさうせき
 小田の賤史しせまを
 芳らくいふあまのこ
 しむ乃よりさあしあ
 陸神を降しとうを
 よまりいひに
 うらちいひに
 うらちいひに
 万葉の神いふてまな
 るまはたさるる神
 かりかへてまな威
 下柳まうてまな威
 坂の今もまな威
 けりの大川のまな

まる乃ありうりうり
 系乃午ありうりうり
 系乃午ありうりうり
 うらちいひに
 うらちいひに
 うらちいひに
 うらちいひに
 陸のまな威
 陸のまな威
 陸のまな威
 陸のまな威

補仁親王

後醍醐天皇
金葉集

百首舟中よ 崇徳院清舟

舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 下は柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ

舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ

権中納言公経

内府正家子
西園寺大政大臣

舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ

舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ
 舟の柳いふまな志
 花もさしせぬとわ

春風乃也...
 万葉集...
 柳乃...
 也...
 付...
 玉...

百首并...
 春風乃...
 千五百...
 柳乃...
 玉...

柳の...
 野...
 乃...
 雪...
 乃...
 雪...
 乃...

柳の...
 野...
 乃...
 雪...
 乃...
 雪...
 乃...

舟のぬきく

ヤク... 春見野

野列... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

舟のぬきく

ヤク... 春見野

野列... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

舟... 春見野

春見野... 舟

白河院

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

白河院

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

春見野

舟

もと本奇やくし道也

たうらふるの芝草

野列云吉野とらふらむと

とらふらむ後らむの吉野

武蔵の吉野大和しそと

大和乃吉野と云可

君と墨業吉野の天衣

帝乃皇居乃終くむの

初い終くく只芝草の

るをらうて花をうらむと

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

山三任秀能

は内書者平
は名如取

たうらふるは芝草とらわけく

とらふらむ後らむの吉野

武蔵有家期長

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

あさ日けむらむの野列

まのつらさ
あつてくさくさ
たぬ人のあふちん
りかーかふん
たのつらさ
たのつらさ
乃をささす
我多りちか
董
まのつらさ
風かりの神
神
まのつらさ
まのつらさ
まのつらさ

まのつらさ
たのつらさ
乃をささす
我多りちか
董
まのつらさ
風かりの神
神
まのつらさ
まのつらさ
まのつらさ

まのつらさ
あつてくさくさ
たぬ人のあふちん
りかーかふん
たのつらさ
たのつらさ
乃をささす
我多りちか
董
まのつらさ
風かりの神
神
まのつらさ
まのつらさ
まのつらさ

まのつらさ
たのつらさ
乃をささす
我多りちか
董
まのつらさ
風かりの神
神
まのつらさ
まのつらさ
まのつらさ

乃し今乃喜の四の腰を花と雪と交野にけりしはもあはれ
ちよと舞へくよもてふかんとりふるやんらん乃に花の由は家
乃に花は雪と果は雨多大概ありなり

花乃舞よふ侍らるる

近部成伸 近部成伸

ちよちよすおあはれちよちよすおあはれ

しよしよすおあはれちよちよすおあはれ

山 山

能因法師 能因法師

は舞の花をさ
うやう入おの鐘
よ花のあよふお
らふし東野列の後
也ま乃ククれり
山乃油さひし

山 山
しよしよすおあはれちよちよすおあはれ

よいよあひ乃りりあはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
はり花うちりかきよのあはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
能りううぶくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
はの金巻寺乃りくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
これいよあはれくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
さくさくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
道世のあはれくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
山よまきあはれくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
花のうきほ世のうき
よあひくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
くちり花をえけぬ
あひれくちり
やまは花のト凡
あふくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
さくさくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり

さくさくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
世のうきほ世のうき
花ん侍らるる
唐澤王母 唐澤王母
やまはくちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり
ま乃くちりくちり乃あはれくちりくちり乃あはれくちりくちり

しる感かりとこほは
よして女のまゝおれ
まゝ乃うろやまの
流る春乃細雨花
乃ちる霖雨の洞
もやみもまゝ
つひにまゝ
しるの陵の洞
花あやめまゝ
ちりれいし
りかお乃
ゆららるる
あはれ

歌きしす 流るる
まゝ乃うろやまの
おつるまゝ
りかお乃
よまゝ
百首
源具親
あはれ

宗徳云けりあはれ

今うのいふむら
舟の武義玉乃
とあはれ
野のいふ武義乃
花のまゝ
むつり
山あな
流るる
あはれ

見山花
大納言経信
山あな
あはれ
播川院
あはれ

つるねさかしく
知られし風情
かきまきくものさ
尾上の中よのふり
麓へちりりなま
さしきし風情
白き舟さうや
つらねさかしく
なまのちりりな
まきし風情
おのつらねさかしく
かきまきくものさ

かちりりさかしく
花十首舟さうや
かきまきくものさ
まきし風情
花十首舟さうや
かきまきくものさ
かちりりさかしく
花十首舟さうや
かきまきくものさ
まきし風情
花十首舟さうや
かきまきくものさ

つらねさかしく
知られし風情
かきまきくものさ
尾上の中よのふり
麓へちりりなま
さしきし風情
白き舟さうや
つらねさかしく
なまのちりりな
まきし風情
おのつらねさかしく
かきまきくものさ

あまのつらねさかしく
知られし風情
かきまきくものさ
尾上の中よのふり
麓へちりりなま
さしきし風情
白き舟さうや
つらねさかしく
なまのちりりな
まきし風情
おのつらねさかしく
かきまきくものさ

自讃丹波抄云比良乃山風小湖上遠小堀れり花

吉野乃由乃など
 さういふあつり
 こゆるのちのち
 けつらるるのち
 野列と云ふも
 大如の如く
 乃心の中よ
 川と橋を成
 馬ては馬の
 只庭の
 人も何ん
 何ん
 と
 ま
 一

何れも
 千五百番
 けつらるる
 と
 ひと
 ち
 花を
 けつらるる
 大上天
 ち
 ち
 ち

吉野乃由乃など
 さういふあつり
 こゆるのちのち
 けつらるるのち
 野列と云ふも
 大如の如く
 乃心の中よ
 川と橋を成
 馬ては馬の
 只庭の
 人も何ん
 何ん
 と
 ま
 一

何れも
 千五百番
 けつらるる
 と
 ひと
 ち
 花を
 けつらるる
 大上天
 ち
 ち
 ち

ついでに新撰の様

庭の栞やうろろ六

くゆつて果実を

見たりはまふよふ

はるるなれとどひ

おの先んせとま

義理をいふ人より

て誰んか栞風を

もておとすもく

是本舞うは

はるるまのうろ

八重栞乃うろろ

よけりくくくく

はるるまのうろ

はるるまのうろ

乃とくくくくく

式子内親王

ついでに新撰乃さうろろ

風なりはるるうろ

唯明記

はるるまのうろ

さうろろ

ふす青丹

春原家徳朝臣

さうろろ乃さうろろ

栞花まのうろ

野列をけり

時ふいせをも

あつて

おと

にやん

律は

分別

アそ

おん

心の

乃と

らに

や

う

う

多くはるるまのうろ

皇天皇后大文徳成女

うろろ

はるるまのうろ

栞花まのうろ... 野列をけり... 時ふいせをも... あつて... おと... にやん... 律は... 分別... アそ... おん... 心の... 乃と... らに... や... う... う... 多くはるるまのうろ... 皇天皇后大文徳成女... うろろ... はるるまのうろ...

あくとよまー花を月ひらり花にまぐさみねのあけお
ほひれに只しききえふるりて花のゆしのうすまひく物な
まきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきと
うりふまきとまきと

小野宮乃まねの宮乃おわすいおわすいおわすい
月端ちりり花尺付くる日よめる

月端ちりり花尺付くる日よめる
但元捕集六月林の
こ何り拾遺者原は
月の林りやまの
とらりりもほほ月林
ちりりあせり時回
らるるやまのすい
今日乃ほほ云乃
のほほまのこ
らるる白あられ

中納言実持拾遺集
白あられ
かゝ人乃母をうら
らるるやまのすい
とらりりもほほ月林
ちりりあせり時回
らるるやまのすい
今日乃ほほ云乃
のほほまのこ
らるる白あられ

今この形をの誰か
はらすのんを
こわれく白あられ
かゝよめる
かゝ人乃母をうら

今この形をの誰か
はらすのんを
こわれく白あられ
かゝよめる
かゝ人乃母をうら

童叟抄云い舟万葉
十五のりり曲水宴宋書
日自魏已後但用三月
不復用已也續齊階
記曰昔周公ト城洛邑
因流水以汎酒故詩曰羽觴隨波
白氏文集用成二年三月三月
河南尹李侍讀洛濱了樓
居易以下十五人を召て舟中
柳陌臨江鐔袿服桃源通海
泛仙舟とある

下署曲水宴り舟りのりあ
洛濱了樓とある
柳陌臨江鐔袿服桃源通海
泛仙舟とある
居易以下十五人を召て舟中
白居易以下十五人を召て舟中
居易以下十五人を召て舟中
居易以下十五人を召て舟中
居易以下十五人を召て舟中

ちかき入社の心
くまのちかき心
國のちかき心
乃ちちかき心
ちかき心
ちかき心

ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心

ちかき心

可貴乎

指授大臣

ちかき心
ちかき心
ちかき心

右原嘉隆卿

ちかき心
ちかき心
ちかき心

皇太后宮大夫後成

ちかき心
ちかき心
ちかき心

ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心

ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心
ちかき心

ちかき心

権中納言國信

推中納言國信

ちかき心
ちかき心
ちかき心

源貞

ちかき心
ちかき心
ちかき心

さうして一法信公が長きおれはさうして
なつかしむ。ねらうおれは。半盤乃ねらうおれはさうして若くはあつた時をとり
てまゝにねらう。さうしてさうして半盤乃ねらうおれはさうして他方おれはさうして
乃ねらうおれはさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

春乃さうしてさうしてさうしてさうして

信公一信公一信公一信公一

ちりあつたさうしてさうしてさうしてさうして

なつかしむおれはさうしてさうしてさうして

信公一信公一信公一信公一
金葉集

おれはさうしてさうしてさうしてさうして

おれはさうしてさうしてさうしてさうして
おれはさうしてさうしてさうしてさうして
おれはさうしてさうしてさうしてさうして
おれはさうしてさうしてさうしてさうして

おれはさうしてさうしてさうしてさうして

半盤乃

おれはさうしてさうしてさうしてさうして

おれはさうしてさうしてさうしてさうして

おれはさうしてさうしてさうしてさうして

おれはさうしてさうしてさうしてさうして
おれはさうしてさうしてさうしてさうして
おれはさうしてさうしてさうしてさうして
おれはさうしてさうしてさうしてさうして

こもろくも花ゆんか

野のよき草目くら

五七五

乃きい

并り

か

谷を

わ

らり

國情

より

上る

早

響

う

若原伊綱 子載傳

明子家基子

こもろくも花ゆんか

乃きい

并り

か

谷を

わ

らり

國情

より

上る

早

響

う

寛平治時名乃之此并合乃

よみ人

こもろくも花ゆんか

乃きい

山

の

若乃戸を

し

百首

梅

乃す

よきまうしつりてん

くわんてんてんてん

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも

波もつゝ結

式子内教

わすれやわすしを
 野別云律務中へ
 命まをなまらふに命
 院とてしるまを
 つまのせしまを
 てまを
 貞徳九六吉野言を
 下平の河内なり神鏡を
 乃神を
 ちまもくもわすれやとよこまひし
 いらまれはるのあやしのあやしいま

わすれやわすしを
 かりぬる野一の處れあけぬの

あひと後 小竹屋
高野山

二女

と

神山乃と昔年と
 卯まうと
 只二花
 うま
 こ
 の
 友
 乃
 かつ
 う
 外の
 下

と
 家務四天王院乃
 ね
 の
 り
 崇徳院より首
 二
 待賢門院
 さ
 け
 の
 ま
 の
 ま

郭といひて

いねのいねねのいね
こゑと下結わて我え
ねねのいねのいね
よねねのいね

ねねのいねのいね
ねねのいねのいね
ねねのいねのいね
ねねのいねのいね

ねねのいねのいね
ねねのいねのいね
ねねのいねのいね
ねねのいねのいね

中納言密持

郭といひて
いねのいねのいね

大中臣宣朝臣

ねねのいねのいね
ねねのいねのいね

大納言理信

ねねのいねのいね
ねねのいねのいね

待客^テ同^ク時^ク鳥^クと^クい^クふ^クな

白河院清奇

あつ御うい
あつ御うい
あつ御うい
あつ御うい

あつ御うい
あつ御うい
あつ御うい
あつ御うい

あつ御うい
あつ御うい
あつ御うい
あつ御うい

ねねのいねのいね
ねねのいねのいね

有仁么

ねねのいねのいね
ねねのいねのいね

前中納言匡房

后醍醐天皇

とむらひのついでに
はたしつゝ結ばせよ
みまゝにまゐり

卯乃花れぢぢね
月乃かたけのりけはあゝのり

詞出乃神鏡に花
あふなれは花種を
かきし七力の種乃

入道前園白太長
舟よもせゆらゝき
皇太后宮太史俊成

氣とにま種とと
乃有中の種りり
可後まらま

びうしちよま乃のり
あへゝあうらう
あまのつとみ

びうしちよまの
師列宗紙況異
宗紙云は舟の心大形
草乃菴とて宗海
たしまゝと書の出志

あへゝあうらう
あまのつとみ
あまのつとみ

三二五

めやうとくさひのこし
ろくにうらひの
あつたん共今
野列云花那
世々のわて
一入はま
こゝ知らり
せんくも
物な
蘭者花時錦
琴筑文花
陸勢觀
たはみ
まね
あう

年号一

寛治八年 堀内院
乃年号也
右をいふは待兼の
待兼ははのふと
くふく待のふと
まふと待のふと

年号一

寛治八年 堀内院
乃年号也
右をいふは待兼の
待兼ははのふと
くふく待のふと
まふと待のふと

相模
は後醍醐天皇の御代
相模守大内侍

御代部
は後醍醐天皇の御代

年号一

相模内侍
は後醍醐天皇の御代

寛治八年 堀内院
乃年号也
右をいふは待兼の
待兼ははのふと
くふく待のふと
まふと待のふと

年号一

寛治八年 堀内院
乃年号也
右をいふは待兼の
待兼ははのふと
くふく待のふと
まふと待のふと

年号一

寛治八年 堀内院
乃年号也
右をいふは待兼の
待兼ははのふと
くふく待のふと
まふと待のふと

とたとのむらびせく
いふまじりしものなり
一はまじりしものなり
ひまじりしものなり
黄昏乃中あつたしふ
只一巻あつたしふ
さまじりしものなり
いふまじりしものなり
とたとのむらびせく

時多をよめる 八景院言合 お大納言言合
ひまじりしものなり
いふまじりしものなり
千五百番舟合
折込太政大臣
いふまじりしものなり
山わとくまじりしものなり
後徳大寺乃大臣家子十首舟張
作らるるものなり
お大納言言合
お大納言言合

あつたむらびせく
けりしものなり
折込太政大臣
いふまじりしものなり
黄昏乃中あつたしふ
只一巻あつたしふ
さまじりしものなり
いふまじりしものなり
とたとのむらびせく

わりとくまじりしものなり
いふまじりしものなり
時鳥乃心をよめる
前太政大臣 頼實公号
お大納言言合
いふまじりしものなり
折込太政大臣
いふまじりしものなり
とたとのむらびせく
社間部とくまじりしものなり

不ろきさしは津れね
本舟の平ねこそいふ
のせよとの夕子昭
とれ津れさるる
と本舟小着しる
かきつりしとせま
野列云山田舟の津務
乃山田こころをせん
こい西登りせん
山田乃在れ松乃村
郭と乃時あられい
すももらとせん
さうこつひくとの同くいまけとりや

かろきさしは津れね
ありきく里乃よりのせ
野列云山田舟の津務
かきつりしとせま
まうすしとせま
かきつりしとせま
郭と乃時あられい
さうこつひくとの同くいまけとりや

よひり勝と可申とこい
郭と乃時あられい
さうこつひくとの同くいまけとりや

よひり勝と可申とこい
後徳大寺乃大臣
さうこつひくとの同くいまけとりや

まねいと何とも申
あゝとさひいよせまふわ
奏今部とほや脊の
何やもまことしを神を
用ひく一音にけり
まきうらやちうわ
まゝのひまきとて言
うとく金篇新書
尚云後舟の神と
成信よやむ制の初
かゝらぬあやめり
根を考まうて坐
膝乃洞を積まう
けつうひまあまう
ありうくよりのあ

あゝやらつまらぬれタラレ
述懐よりせく百首舟よふ侍り
くの時
皇太后宮大史後成
くあゝあやめりわさうけうと
午されうまゝ。神乃ちとて
五月お目くらまはけりう侍り。
介り
大納言経信
ありあゝのちりあゝむ乃とてい
のりうらうらりあまの袂う
けらねまゝいよふ侍り。比

あゝとさひいよせまふわ
奏今部とほや脊の
何やもまことしを神を
用ひく一音にけり
まきうらやちうわ
まゝのひまきとて言
うとく金篇新書
尚云後舟の神と
成信よやむ制の初
かゝらぬあやめり
根を考まうて坐
膝乃洞を積まう
けつうひまあまう
ありうくよりのあ

あゝとさひいよせまふわ
奏今部とほや脊の
何やもまことしを神を
用ひく一音にけり
まきうらやちうわ
まゝのひまきとて言
うとく金篇新書
尚云後舟の神と
成信よやむ制の初
かゝらぬあやめり
根を考まうて坐
膝乃洞を積まう
けつうひまあまう
ありうくよりのあ

上東門院小が將

よるうさうま物也

はなれ乃中のみ

言昔云月の事よ向
て物物とれもふ
月多の比月物也
晴るもなれい雲の
昭方不歳と晴もやす
新と忘たり物と心
なり

何つらけくともなり
み月乃多晴の風ふ
あるの物乃霞なる
よあく何片れんもの本
え合されけし風物も
く言れえ板の縁こ
なり

鳥羽田氏良 二首

はなれ乃中のみ
まよふりみり月なむりり那

百首奇也一詩

前大納言忠實

何つらけくともなり
はなれもも風わもまなり

六十首奇也一詩

藤原定家卿良

はなれ乃月にはいれぬいりりなり

りこ 十五

標はえん人とりまを

はなれ乃月にはいれぬ
み月乃の晴るもまを故
まよふ月にはいれぬ
山より物も年晴物
とく物も斗の心を物
よまのうさうま
かまのうさうまわれ
晴ぬさひい多れさひ
しつらふんやゆせん
都のうさうまはなれ
いさひも晴るもふ
月多の物物もわ
はなれ乃中のみ
み月乃の晴るも月

いさひも晴るも

大神宮よまのりりりりりりりり

大上天皇

はなれ乃中のみ
まよふりみり月なむりり那

建仁元年三月奇合も多は那の

こころを

二条院 清成

はなれ乃中のみ
まよふりみり月なむりり那

歌

皇太后宮大女御

吹きく可なり無き

おわぬ川よりやま

ま乃なりてりて

つとむとあふん

まのやまは

ふくあの中なる川

野列云の方乃中

おひらき里をれい

アとのころれ

あつ桂の里より

後らと石に桂の

月をころ本意

とすまはのり

園をゆくと

をかんてい

千五百番并合

皇太后宮大史信成

おわぬ川よりやま

くぬきま乃より

若原宮大史信成

ふくあの中なる川

りふちゆりて

百番并合

持政大政大臣

いざり火乃びりの

卯三

いざり火のびりの

去昔云葉草の

の里と海く

乃甲のほの

と海せると

まのまを

戸ののまの

ろくまを

まのまを

おのまを

まのまを

まのまを

まのまを

まのまを

まのまを

まのまを

いざり火のびりの

式子内親王

まのまを

まのまを

名御せく竹風

号野宮大史

つとまを

まのまを

まのまを

まのまを

皇太后宮大史信成

まのまを

衣日とてはくきいしるいなりいしとり物あれいつけ侍也
青苔地上消残雨緑樹陰前 遂晚涼 野行説もたつてあや
まらぬい細流を流るゆきれども音高乃多お自然う清きまよ
かりあはほくとりあゆみあはれりまきくの音い

千五百番奇合

拵中納言公経

露すくも庭乃玉所うらあし
玉簪のしらあひは
深きあまの村
あま玉簪のあひふ
風をいり合あま
玉世塵女乃ねり
乃振るあま

露すくも庭乃玉所うらあし
一ひしすきぬゆらら乃雪
雪隔遠望こつる心を清侍も
源信光朝臣
トツチ
十市りいハゆららすくく乃

十市大和入天香久
山乞も大和十市郡
あり十市乃里り
まはるやんくも乃
そふやくれや
とこあ初乃結簪や
あいの里や町あん
こちう一風情もや
庭のあひまもかひぬ
夕星のあはれ月乃
さるうく写しゆら
さりけらくく夕星
一氣あまのあひ
ゆらら乃や
夕星あまのあひ

ゆららくやま中かられゆ
夏月をよめる
活之位お政
六載あは
庭乃あまのあひまもかひぬ
うらりけらくくすあまの月くも
百首奇中よ武子内親王
ゆらら乃雪とあまのあは乃月
かきく山り日くく乃
千五百番奇合
お大納言忠良

山の日晩のつらさ
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

中つらさの日さす
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

山の日晩のつらさ
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

中つらさの日さす
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

と寂寥な秋のつらさ
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

やがて秋の下葉のつらさ
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

二条院讃歌

あゝ秋のつらさ
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

あゝ秋のつらさ
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

あゝ秋のつらさ
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

あゝ秋のつらさ
夕星の光のほろろしい
今宵のゆくはきり
秋のつらさのつらさ

花とよめるまじし不空乃人同世に我れ初来と云々わづらひ
おもひつゝもわづらひも花のわづらひもなまむわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも

五十首哥をまゝ一時

新改大改本

わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも

わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも

刑部卿頼輔舟合志傳々々小細流
と後傳々々 後志法師

秋生るわづらひも

秋生るわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
秋生るわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
秋生るわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
秋生るわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
秋生るわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも

わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも

聖妻露滋とりわづらひも

う倉院清哥

わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも
わづらひもわづらひもわづらひもわづらひもわづらひも

乃知れ乃吹く乃地を無くしては秋はもろくも
用はあやしく秋よと名何れ夢華録云京師五秋滿街賣楸葉
婦女兒童皆前成花樣戴之形製不一事文類聚卷十三
志々露乃玉より下せ垣の中あられは露をけくむすく
ゆてゆてまゝとよむせむりやせの露のみとてゆてゆて
何れふととる乃露まゝとてゆて言語同ぬのやま

白はゆ乃情まらる

けき原氏ク乳乃ま

り彼をま乃君乃

より原氏の君を乃

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

夕影をよめる

前太政大臣

白はゆ乃あさけよまらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

乃まらるる心あり

新三十五

式子内親王

百首并よみ侍々

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

情まらるる心あり

太神宮よまらるる心あり

中よ 太上天皇

山里れ暮のあや
山家乃るれくわ
て晴くやも樹く
と影くくあり物
乃松の夕雲のす
しき風情をよむ
文治六年 常侍
文治六年正月兼實
公陸娘任子女常侍
後名親院乃申さる
岩井くむ所くわ乃
井とく心はよ小菴
乃よ水玉打却く
よりくめく秋乃
夕雲のすよと見

山里乃暮れあやとくく
中よくくくくくく
文治六年 常侍入内屏風
入道前関白太政大臣
兼實公
岩井くむ所くわ乃と毎玉くく
かひくくくく小秋乃ゆよはゆ
千五百番舟合
官内
かく枝さすゆ小乃浦梨初秋
ありきあくくくも風く暮めく

えく涼きこく
かく枝さすゆ小の
乃まかもあくくく
秋乃りまかも成も
さく叶をあり西の
よく晴くく暮めく
あくくく
夏衣のくく
野列をくく
やまのゆき秋く
くくをり合のえ
ことりかくく
きくハ秋のくく
本舟 秋

えく涼きこく
かく枝さすゆ小の
乃まかもあくくく
秋乃りまかも成も
さく叶をあり西の
よく晴くく暮めく
あくくく
夏衣のくく
野列をくく
やまのゆき秋く
くくをり合のえ
ことりかくく
きくハ秋のくく
本舟 秋
百首舟をりく
あ大僧正
まこるくくく
あや小舟ぬく人
延喜寺時月次乃屏風
年甲十二月の

壬生忠孝

まをすつるあやむし
朗詠 曉夜のきこ
ま乃れりいひな
いふあまのこゝろ
交果くく霞は
月も清くくわら
うらやま心をよ
れもよわしけき
乃と病とあま
朗詠乃鄭三系

まをすつるあやむし
朗詠 曉夜のきこ
ま乃れりいひな
いふあまのこゝろ
交果くく霞は
月も清くくわら
うらやま心をよ
れもよわしけき
乃と病とあま
朗詠乃鄭三系

白せく 眠る乃ら系入る
千るまき川の内か
くくく孤独
乃と病とあま
朗詠乃鄭三系

乃三十五

